韮山代官江川坦庵の功績と評価

はじめに

世界遺産に認定された韮山反射炉は代官江川坦庵(英龍)が着手したものである。名代官の名を馳せた坦庵は本校の学祖として仰がれており、戦前の教科書には韮山反射炉と共に肖像画も載せられ、全国的な知名度をもった人物であった。しかし、今日ではその知名度は低く、私達や親の世代にはほとんど知られていない。

そこで、大正 10 年(1921 年)から昭和 21 年(1946 年)までの国定教科書の中からいくつかと、現在の高校日本史 B の教科書を調査することとした。

大正 10 年(1921 年)の中学校の教科書(資料ア)には、坦庵の肖像画や韮山反射炉と共に「江川太郎左衛門坦庵をして、西洋の兵學・砲術を研究せしめ兵器を作らしめたり。」(注 1)とある。

しかし、昭和 15 年(1940 年)の小学校の教科書(資料イ)には、江川太郎左衛門の名は掲載されていない。

また、昭和 16 年にはかつての尋常小学校が国民学校に変わり、昭和 17 年には第二次世界大戦において日本の劣勢が際立ってきた。

そして、昭和 18 年(1943 年)の小学校の教科書(資料ウ)には再び反射炉の写真と「江川太郎左衛門らを用ひて、新しい兵器や戦術を研究させ、軍備充実をはかりました。」(注 2)という記述が見られる。

そして、昭和 21 年(1946 年)の小学校の教科書(資料エ)には、江川太郎左衛門の名だけでなく反射炉についての記述も見られない。

現在の高等学校の教科書(資料オ)には、ゴシック体で「幕府も末期には、代官江川太郎左衛門(坦庵)に命じて伊豆韮山に反射炉を築かせた。」(注 3)と書かれている。

これらの結果から、昭和 18 年に坦庵や反射炉についての事項の掲載が復活したのは、第二次世界大戦における日本軍の劣勢を受けて、さらに国民の戦意を高めるためであり、その後坦庵は軍事に関連する人物として、戦後行われた GHQ による教科書の戦時教育部分の削除によって戦後の教科書には登場しなくなったと考えた。

(注 1) 芝葛盛『新訂 中學日本歴史 下巻』明治書院、1921 年、148~149 頁
(注 2) 海後宗臣『日本教科書大系 近代編 第二〇巻 歴史(三)』講談社、1962 年、339 頁
(注 3)『諸説日本史 改訂版』山川出版社、2016 年、233 頁

本論

1 数々の評価

江川坦庵の評価について、福沢諭吉は次のように言及している。「江川太郎左衛門も幕府の旗本だから、江川様と蔭で屹と様付けにして、これもなかなか評判が高い。あるとき兄などの話に、江川太郎左衛門という人は近世の英雄で、寒中袷一枚着ているというような話をしているのを、私が側から一寸と聞いて、なにそのくらいのことは誰でも出来るというような気になって、ソレカラ私は誰にも相談せずに、毎晩掻巻一枚着で敷蒲団も敷かず畳の上に寝ることを始めた。スルトは母これを見て「何の真似か、ソンナことをすると風を引く」と言って、頻りに止めるけれども、トウトウ聴かずに一冬通したことがあるが、これも十五、六歳の頃、ただ人に負けぬ気でやったので身体も丈夫であったと思われる。」(ア)
また、勝海舟は「江川太郎左衛門も、またかなりの人物であつた。その嘉永安政の頃に、海防のために尽力したことは誰も知つて居るだらう。この男は、山の中で成長して、常に狩猟などをして筋骨を練り、明け暮れ武芸に余念がなかつた。が、しかし、人の知らないうちに嗜んで居たと見えて、ある時水戸の屋敷に召されて、烈公から琴を一曲と所望せられたのを、再三辞したけれども、お許しがないから止むを得ず一曲奏でたが、その音悠揚として迫らず、平生武骨なのにも似ないで、いかにも巧妙であつたから、列座そのものが手を拍つて感嘆したといふことだ。」(イ)
と知られざる坦庵公の一面を紹介している。韮山塾は全国的知名度を誇っていて、坦庵の名も上記の通り全国レベルのものであったと言える。

(ア)福沢諭吉/土橋俊一 校訂・校注 『福翁自伝』株式会社講談社、2013 年、22 項
(イ)勝海舟/江藤淳・松浦玲編『氷川清話』株式会社講談社、2011 年、92 項

2 構想と経過

ここでは、坦庵の構想と、実際に実行されるまでの経過を追っていく。
(1)台場
坦庵は天保 10 (1837)年 4 月の「一、相州御備場其外見分見込之趣申上候書付」において、「相模國觀音崎御臺場見分仕候處、…右場所ハ海防之要路に付、新規御臺場御取建可相成地形、…鴨居村之内字三軒屋岬、走水村の内十石崎、同籏山岬、…右三ヶ所え新規御臺場御取建…」「一、富津御臺場は平地に御座候得共、…出洲之内字小三塚と唱候場所、…右場所え新規御臺場築立、…」(注 1) と、觀音崎と富津に新たに台場を造ることを進言している。
また、同書に「異船相見え候節…城ヶ島并に洲之岬え大筒被差置、異船見掛次第相圖之號砲を打放候様いたし、相州之方は劔岬、千駄岬、平根山、觀音崎 (資料カ) と狼煙を以、請繼、

安房、上總之方は大房岬、明金岬、竹ヶ岡、富津と前同様請繼候はゝ、夫々手配も行届可申奉存候」とあり、浦賀水道を江戸の防衛ラインにしようとしていたことが分かる。しかし、当時の大砲の飛距離を考えると届かず、財政的な問題もあった。そこでペリー来航直後の嘉永 6 (1853)年 8 月に品川に造られることになった。当初は洲崎から深川洲崎にかけて 11 基の御台場が造られる予定であったが、財政面などで完成したのは第一～第三、第五、第六台場のみで、第四、第七台場は工事半ばで中止、第八台場以降は未着手となった。

(2)農兵

坦庵は農兵を組織することも重視した。天保 10（1837）年 5 月の「伊豆國御備場之儀ニ付申上候書付」で、「農兵之儀は早急之御役には相立申間敷候得共、追々仕込立候ハゝ、隨分御用立可申奉存候…」（注 2）と、農兵は後々役に立つことを説いている。しかし、その後も幕府から許可が得られなかったため、嘉永 3（1850）年 6 月の「豆州下田湊海防御備向存寄之趣申上候書付」で「農兵之儀に付では、去酉五月中差出置候書面之趣も之有、其他猶存付之趣も有之候處、事永に付御尋も御座候はゝ別段申上候様可仕候」（注 3）と再度必要性を訴えていることからも坦庵がいかに農兵を重要視していたかがうかがえる。結局坦庵が生きている間に作られることは無かったが、その後文久 3（1863)年に設置が許可され、以後陸軍の礎となっている。農兵論は江戸中期に熊沢蕃山や荻生徂徠が主張しているが、彼らの目的は折原祐教授の「江戸期における農兵論の系譜ー熊沢蕃山と荻生徂徠ー」によると「武士を知行地に帰農させることによって、武士の消費支出を押さえ、それによって武士を窮乏から救済する」（注 4）ことであったが、坦庵の目的は海防であり、この 2 人の目的とは全く異なるものである。

(3)大砲

江川邸では元々庭で青銅砲を製造していた。しかし、原料となる錫や銅の値段が高いうえに、軟らかくて弱いため、坦庵は鉄製の大砲を作ることを検討した。初めは 3 分の 1 ほどの大きさで作っていたが、うまくいかなかった。（注 5）安政元（1854)年 6 月に韮山反射炉の建造許可が下りたが、完成する前に亡くなった。その後反射炉では四門の鉄製大砲建造に着手し、うち一門は「反射爐御取建日記」（注 6）によると雨により失敗したが、残り三門は成功し、品川の台場に運ばれた。それまで青銅砲しか無かった日本で精度の高い鉄製大砲を製造できたことは日本の製鉄業の発展における大きな一歩であった。

(4)造船

19 世紀初頭から外国船の来航が目立つようになったが、江戸幕府は武家諸法度の寛永令において「五百石積以上の船、停止の事。」（注 7）と大船の建造を禁止していたため、軍船を持っていなかった。坦庵は早い時期からこのことへの危機意識を強く持っており、天保 8（1837)年 1 月の「伊豆国御備場之儀ニ付存付申上候書付」や、天保 10(1839)年 4 月の「相州御備場其外見分見込趣申上候書付」、嘉永 2(1849)年 5 月の「存付之趣申上候書付」、嘉永 6(1853)年 9 月の「水戸前中納言殿御書拜見仕候ニ付、再考之趣申上候書付」などで再三建造を進言している。また、作った船は普段は捕鯨船や廻米船として利用し、その利潤を国防

費に充てようとしていた。安政元(1854)年 11 月にロシア船ディアナ号が安政東海地震で座礁し、戸田で代わりの洋式軍船を作ることになった。坦庵はその指揮官に任命され、無事に船を完成させた。ここで洋式軍船の製造法を手に入れ、その後幕府の命を受け君沢形と呼ばれる 100 t の洋式軍船と少し小さい韮山形と呼ばれる 50t の洋式軍船を作り、品川台場に備えた。(注 8)

以上のことから、坦庵の構想は必ずしも全て実現できたわけではないものの、後世に大きな影響を与えるものが多いことが分かる。また、その時期に注目すると、モリソン号事件が天保 8 (1837)年、ペリー来航が嘉永 6 (1853)年であり、早い段階で危機感を持っていたといえる。

（注 1）戸羽山瀚『江川坦庵全集下巻』江川坦庵全集刊行會、1955 年、海防・外交資料 13、14、15 頁
（注 2）戸羽山瀚『江川坦庵全集下巻』江川坦庵全集刊行會、1955 年、海防・外交資料 22 頁
（注 3）戸羽山瀚『江川坦庵全集下巻』江川坦庵全集刊行會、1955 年、海防・外交資料 49 頁
（注 4）折原祐「江戸期における農兵論の系譜ー熊沢蕃山と荻生徂徠ー」『敬愛大学研究論集』、1955 年、82 頁
（注 5）財団法人江川文庫学芸員橋本敬之氏より聞き取り
（注 6）戸羽山瀚『江川坦庵全集上巻』江川坦庵全集刊行會、1954 年、反射爐御取建日記 198 頁
（注 7）松本洋介『改訂版詳録新日本史史料集成』、教育図書出版第一学習社、2019 年 1 月 10 日、210 頁
（注 8）文学博士仲田正之先生より聞き取り

3 海外事情の把握

坦庵は西洋事情に精通し、情報収集に余念がなかった。坦庵がどのように海外の情報を把握し、活用していたかについておっていく。

(1)蘭学

坦庵は蘭学を重要視していた。幕府に提出されていた「オランダ風説書」についても把握を欠かさず、彼が生活していた江川邸には、「オランダ風説書」の和訳である「外国事情書」が保管されている。(注 1) また、坦庵の政治顧問斎藤弥九郎の仲介により、蘭学者の渡辺華山と交流を得た。それは、天保八(1837)年 10 月 29 日の華山から坦庵へ向けた書簡の中で明らかになっている。「江川坦庵全集」には「政治上に於ける意見の交換はもとより蘭学の研究・諸外国の情勢分析にいたるまで両者の間には深い交流が進められた。」(注 2)とあり、

天保 9(1838)年 3 月 15 日に華山が坦庵へ送った手紙の中では、「…洋船之銃大低相定め候處は、三十六ポンド、陸は二十四ポンドとか申事ニ承リ候、…」(注 3)海外軍船の設備や大砲の数、大きさなどについて述べている。

(2)着発弾の開発

英龍は安政元(1854)年 7 月砲術・航海術・蒸気船製造の習得を目的とする長崎遊学を幕府に願い出るが断られる。そこで腹心である柏木総蔵・望月大象・谷田部郷雲の 3 人を長崎に派遣し、新式弾ガラナートの製法究明を命じる。3 人は長崎にいたオランダ軍艦スームビング号艦長フハービウスに質問するも国家機密であるため断られた。しかし「フハービウスは大いに驚き、坦庵の知識と着眼を称賛した。」(注 4)ともあり、坦庵の情報収集能力の高さが窺える。

(3)品川台場の建設

品川台場の建設にあたって坦庵は海外の建築書を使用している。主な建築書は「エンゲルベルツ之製堡書」「パステウル之製城家之為に著述いたし候辞書」「ケルキウエーキ之海岸之條」「フルシキルレンデ・ソールテン・ファン・バッテレイン」の 5 冊で(注 5)、5 冊とも 1830～40 年代のものであり、坦庵がこれらの本を研究し始めたのは嘉永元(1847)年の頃である。台場の建設は当時の最新に近い築城書をもと進められた。坦庵には西洋流砲術の導入が進められる中で、台場自体が和流兵法の築城術を脱却できていないという意識があった。

(4)中浜万次郎の登用

黒船来航の知らせを聞いた担庵はアメリカから帰国し、土佐で働いていた万次郎を登用することにした。万次郎は嘉永 6(1853)年 11 月 12 日「御代官江川太郎左衛門手付」(注 6)に命じられ、担庵直属の通訳兼護衛となった。担庵は万次郎の知識を翻訳に用いるだけでなく、武器の開発にも取り組んだ。坦庵は万次郎が長崎で没収されたボートや書籍類、ピストル等の変換を幕府に申請し、万次郎の持っていたピストルを増産しようとした。

(5)幕府への忠告

坦庵は幕府へ提出した意見書の中でも度々海外事情について報告している。例えば、天保 8(1831)年「歐羅巴洲中一大國ポーレント申所之魯西亜ニ而攻破、其國中高官之者共迄、夫々吟味之上、妻子引離、大體、日本西北之地シベリヤに…」(注 7)と、シベリアに追放されたポーランド人が蝦夷地へ侵入してくるのではないかと、忠告している。また、嘉永 2(1849)年の「存付之趣申上候書付」では、「…何も火縄を用ゆる事は免れ不申、凡、火縄之儀は風雨雪中甚差支、…」(注 8)と現在の武器が不十分であることを述べた後西洋の銃について述べ、海外の軍事力の高さを忠告している。

以上のことから坦庵が海外事情について非常に敏感であり、世界情勢や軍事力の把握に努め、現実的な日本との差を理解していた。

(注 1)財団法人江川文庫橋本敬之先生への聞き取りより

(注 2)戸羽山瀚『江川全集上巻』江川坦庵全集刊行會、1955 年、江川坦庵傳記 111 頁
(注 3)同上
(注 4)仲田正之『韮山代官江川氏の研究』吉川弘文館、1998 年、162 頁
(注 5)浅川道夫『お台場　品川台場の設計・構造・機能』錦正社、2010 年、74、75 頁
(注 6)仲田正之『江川坦庵』吉川弘文館、1985 年、204 頁
(注 7) 戸羽山瀚『江川全集上巻』江川坦庵全集刊行會、1955 年、海防・外交資料、2 頁
(注 8)戸羽山瀚『江川全集下巻』江川坦庵全集刊行會、1955 年、海防・外交資料 25 頁

4 後進の育成

坦庵は代官としての職務を全うする傍ら、高島平で高島秋帆による洋式砲術の公開演習を観覧した。それを機に坦庵は秋帆に弟子入りし、1841 年(天保 12 年)5 月に日本初の大規模な公開演習を徳丸原で行う。これには水戸や薩摩など全国の藩士が参加し、成功を収めた。これにより秋帆は幕府の砲術指南役となり、坦庵は秋帆から免許皆伝を受けた。その後、同年 8 月 5 日から後に坦庵の最初の門人となる佐久間象山が再三江川家に来訪し、坦庵の拒否の中何度も入門を懇願し、同年 8 月 20 日の夕刻に砲術師範認可がおりしだい教授することを約した。もっとも、この認可がおりたのは 9 月 6 日のことで、象山は翌日 7 日午後に正式に入門を許可された。これが坦庵の砲術教授の創始である。
上述は江戸での出来事であり、坦庵は砲術稽古を行う場合、実地の訓練は江戸では行うのが困難と判断し、市中を離れた韮山で稽古を行うこととした。そして坦庵が韮山に帰った天保 13 年 10 月より韮山塾が始まった。
この塾では様々な後に著名人となる人物が学んでいる。老中の阿倍正弘をはじめ真田幸貫、本多忠寛などの大名などがいわば名誉門人であり、佐久間象山、橋本左内、桂小五郎、斎藤弥九郎、後に大山巌、黒田清隆などがいる。
いずれの人物も、後に政府の大役や著名な思想家、剣客など重要な立場についている。
坦庵が育成した後輩たちが明治新政府の重要な役職など、後世に繋がれた立場に置かれたので、西洋砲術を重視するなどの彼の考え方は後世に引き継がれ、役立ったと言える。

結論

序文の通り坦庵は戦争のために韮山反射炉や、大砲を始め、台場や農兵をつくったと考えられ、国家主義や戦争を鼓舞するものとして GHQ の戦後の改革時に墨塗りにあってしまった。しかし、実際に彼が構想したものは、外国に攻められた時にどのように日本を防衛しようと考えた現実的なものだといえる。外国の諸事情に問題意識を持っていなかった当時の日本に、誰よりも早く彼は危機感を覚えた。しかし、彼の構想は評価されるにはまだ早す

ぎたのである。幕府は西洋諸国に対して危機感をもっていなかった。彼が幕府の人間であったことは彼の構想に大きな制約をかけた。大型船の建造企図は武家諸法度に禁止の旨があり、台場建設でも幕府には予算の問題などがあった。しかし坦庵は幕府の制約に縛られながらも、自分の意見を幕府に提出し続け、外国からの攻撃に備えようとした。彼の死後をみると、その構想や功績が評価されるべきものであることがわかる。坦庵の構想当初の台場建設予定地には、第二次世界大戦時に第一、第二海堡が作られ、韮山塾では幕府のみならず長州藩や薩摩藩の藩士たちを含めた多くの門人たちに砲術などを教え、彼らは明治維新や新政府で大いに活躍した。また彼の死後完成した反射炉は日露戦争時にその技術を評価され、現在では世界遺産に登録されている。このように彼の構想や功績はその後の日本の基盤となり、その発展に大きく貢献しているのだ。よって彼の構想していたものと、その先見性を称えて評価すべきだといえる。

【資料】

（資料ア）

近藤守重と間宮倫宗

英人の來航

こと、近年までは倚本邦製圖の基本となれり。幕府はまた近藤守重・間宮倫宗等をして、北邊を探檢せしめたり。近藤守重は、寛政十年、遠く擇捉島に至り、「大日本惠土呂府」と記せる標柱を建て、間宮倫宗は、文化五年樺太を探檢し、遂に大陸に渡り、西伯利亞東海岸の地理を踏査してかへれり。

江川太郎左衛門

外國船擊攘令　文化五年、英國の船また長崎に來りて、暴行を爲せしかば、奉行松平康英憤慨して、これを擊たんとせしも、機を失し、自殺して幕府に謝せり。これより攘夷の論やうやく起り、幕府も、文政八年には、外國船擊攘の令を下すにいたれり。されど蘭學者の中には、開國の意見を有するもの少からず。高野長英・渡邊崋山のごときは、攘夷の不可なることを痛論し爲に重刑に處せられたり。

海防の準備

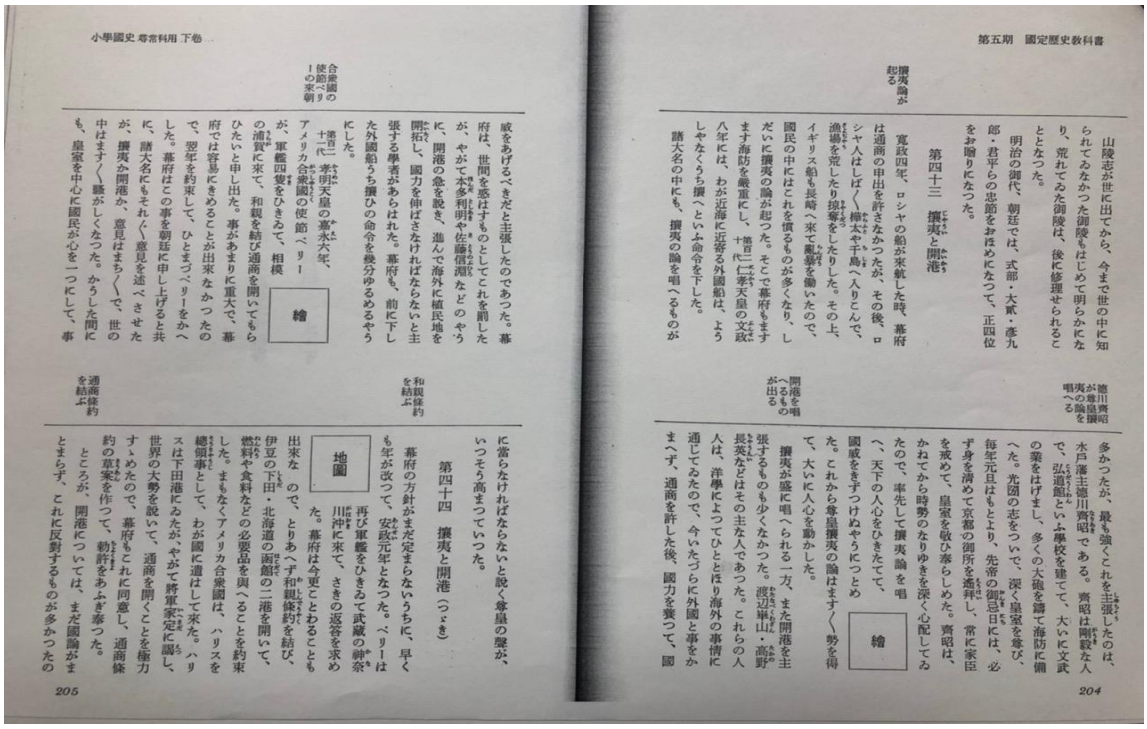
海防の準備　かくて海防・攘夷の論益々喧しく、幕府も軍艦・銃砲を和蘭より求め、海防の策を講じ、また高島四郎太夫・江川太郎左衛門をして、西洋の兵學・砲術を研究せしめ、兵器を作らしめたり。諸大名の中にも、水戸の德川齊昭・

高島四郎太夫
江川太郎左衛門

反射炉

江川太郎左衛門は、伊豆韮山の中村橋邊に爲に築造せしものにして、今なほ北條より南中里の中村橋邊に殘存せり。

（資料イ）



攘夷論が起る

山陵志が世に出てから、今まで世の中に知られてゐなかつた御陵もはじめて明らかになり、荒れてゐた御陵は、後に修理せられることとなつた。

明治の御代、朝廷では、式部・大貳・彥九郎・君平らの忠節をおほめになつて、正四位をお贈りになつた。

第四十三　攘夷と開港

寬政四年、ロシヤの船が來航した時、幕府は通商の申出を許さなかつたが、その後、ロシヤ人はしば〳〵樺太・千島へ入りこんで、漁場を荒したり掠奪をしたりした。その上、イギリス船も長崎へ來て亂暴を働いたので、國民の中にはこれを憤るものが多くなり、しだいに攘夷の論が起つた。そこで幕府もますます海防を嚴重にし、第百二十一代仁孝天皇の文政八年には、わが近海に近寄る外國船は、ようしやなくうち攘へといふ命令を下した。

諸大名の中にも、攘夷の論を唱へるものが多かつたが、最も強くこれを主張したのは、水戸藩主德川齊昭である。齊昭は剛毅な人で、弘道館といふ學校を建てて、大いに文武の業をはげまし、多くの大砲を鑄て海防に備へた。光圀の志をついで、深く皇室を尊び、毎年元旦はもとより、先帝の御忌日には、必ず身を清めて京都の御所を遙拜し、常に家臣を戒めて、皇室を敬ひ奉らしめた。齊昭は、かねてから時勢のなりゆきを深く心配してゐたので、率先して攘夷論を唱へ、天下の人心をひきたてて、國威をきずつけぬやうにつとめた。これから尊攘夷の論はますます勢を得て、大いに人心を動かした。

攘夷が盛に唱へられる

攘夷が盛に唱へられる一方、また開港を主張するものも少くなかつた。渡邊崋山・高野長英などはその主な人であつた。これらの人人は、洋學によつてひとと世に海外の事情に通じてゐたので、今いたづらに外國と事をかまへず、通商を許した後、國力を養つて、國

開港を唱へるものが出る

繪

合衆國の使節ペリーの來朝

威をあげるべきだと主張したのであつた。幕府は、世間を惑はすものとしてこれを退けたが、やがて本多利明や佐藤信淵などのやうに、開港の急を說き、進んで海外に植民地を開拓し、國力を伸ばさなければならないと主張する學者があらはれた。幕府も、前に下した外國船うち攘ひの命令を幾分ゆるめるやうにした。

第百二十一代孝明天皇の嘉永六年、アメリカ合衆國の使節ペリーが、軍艦四隻をひきゐて、相模の浦賀に來て、和親を結び通商を開いてもらひたいと申し出た。事があまりに重大で、幕府では容易にきめることが出來なかつたので、翌年を約束して、ひとまづペリーをかへした。幕府はこの事を朝廷に申し上げると共に、諸大名にもそれ〴〵意見を述べさせたが、攘夷か開港か、意見はまち〳〵で、世の中はます〳〵騷がしくなつた。かうした間にも、皇室を中心に國民が心を一つにして、事に當らなければならないと說く尊皇の聲が、いつそう高まつていつた。

繪

和親條約を結ぶ

通商條約を結ぶ

第四十四　攘夷と開港（つゞき）

幕府の方針がまだ定まらないうちに、早くも年が改つて、安政元年となつた。ペリーは再び軍艦をひきゐて武藏の神奈川沖に來て、さきの返答を求めた。幕府は今更ことわることも出來ないので、とりあへず和親條約を結び、伊豆の下田・北海道の函館の二港を開いて、燃料や食料などの必要品を與へることを約束した。まもなくアメリカ合衆國は、ハリスを總領事として、わが國に遣はして來た。ハリスは下田港にゐたが、やがて將軍家定に謁し、世界の大勢を說いて、通商を開くことを極力すゝめたので、幕府もこれに同意し、通商條約の草案を作つて、勅許をあふぎ奉つた。

ところが、開港については、まだ國論がまとまらず、これに反對するものが多かつたの

地圖

（資料ウ）

きを知り、外國の船が日本をうかがひ始めた寛政のころから、尊皇の精神が、しだいに高まつて行きました。明治の御代、朝廷では、尊皇の志の厚かつた、これらの人々に對し、その功をおほめになつて、それぞれ位をお授けになりました。

第十一　うつりゆく世

一　海　防

幕府が國を鎖して、およそ百五十年の間に、海外の形勢が、すつかり變りました。まづ、オランダが盛んになり、一時は、世界中の貿易を獨占するのではないかと思はれるほどでしたが、あまりに利益をむさぼつて、各地の人々からきらはれ、かつ海軍が振るはないために、しだいに衰へてしまひました。これに代つて榮えたのが、イギリスであります。

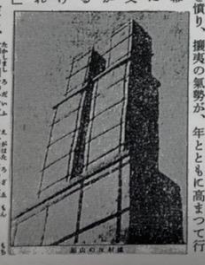
イギリスは、東山天皇の御代、富士に寶永山ができた年に、本國が一だんと大きくなり、勢に乘じて、インドの侵略を進めました。また、北アメリカから、オランダやフランスの勢力を追ひ拂つて、その產物や貿易の利益を占め、やがて、世界でいちばんゆたかな國になりました。ところで、イギリスは、北アメリカへ渡つた移民に對し、いろいろむごい仕打ちをしましたので、それら移民は、つひに反旗をひるがへし、本國から獨立して、新たにアメリカ合衆國といふ國を建てました。光格天皇の天明年間、今から百六十年ばかり前のことであります。

一方ロシヤは、わが天正のころから、シベリヤの侵略を始めてゐました。どしどしと東へ手をのばし、やがて滿洲の北境に迄せまりました。そこから更に南へくだつて、どこかに不凍港を得ようとするのです。そのころ、滿洲や支那を治めてゐた清は、兵を出してたびたびこれを退け、條約を結んで、外國安寧を國境と定めました。ロシヤは、仕方なく進路を東へ轉じて、カムチャッカ半島を占領しました。これもちやうど、わが國では、寶永山のできた年に當ります。ここを根城にして、なほ東の方、アリューシャン列島からアラスカを侵略し、更に南下して、千島列島をうかがひ、イルクーツクに日本語學校を設置するなど、わが國を侵略する準備を整へました。寛政四年、ロシヤの使節が根室へ來たのは、かうした野心の現れであります。

幕府は北方が危いと知つて、急いで海防の手配りをし、近藤重藏に蝦夷地を巡視させ、高田屋嘉兵衛に擬捉島で漁場を開かせ、また伊能忠敬に蝦夷地の測量を命じました。更に、箱館奉行を置き、南部・津輕の二藩にも、北方の警備を命じました。やがて文化元年、またもやロシヤの使節が長崎へ來て通商を求めましたが、千島・樺太に對するロシヤの壓迫は、このころ一だんと加りました。

幕府は、沿海の諸藩に命じて、ますます海防をきびしくさせ、亂暴をはたらいた外國船の打ち拂ひを許すことにしました。また、箱館奉行を松前奉行と改め、仙臺・會津二藩の兵を警備に加へて、北方の守りを固めました。間宮林藏が、幕府の命を受けて、樺太や沿海州を探檢したのも、この時のことであります。

折も折、イギリスの軍艦が、長崎港をおそつて亂暴をはたらき、時の長崎奉行松平康英が、責任を感じて切腹するさわぎが起りました。その後英艦は、しきりにわが近海に出沒し、仁孝天皇の文政元年に、シンガポールを占領してから、その亂暴は、いよいよ激しくなりました。國民は、大いにこれを憤り、攘夷の氣勢が、年とともに高まつて行きました。幕府も、つひに決心して、文政八年「わが近海に近よる船は、見つけしだい、これを打ち拂へ。」との命令をくだし、高島四郎太夫・江川太郎左衛門らを用ひて、新しい兵器や戰術を研究させ、軍備の充實をはかりました。



諸大名の中でも、水戸の德川齊昭を始め、薩摩の島津齊彬、佐賀の鍋島直正、福井・宇和島・津の諸藩主など、盛んに攘夷をとなへ、かつ海防のことにつとめました。わけても齊昭は、光國の志をついで、尊皇の心に厚く、弘道館

（資料エ）

むきがはでになるにつれて、物いりが多くなり、どうしても、その俸祿の米を、貨幣にかへるより外はありませんでした。そのために、全國の大名は國もとから江戸や大阪に、米やそのほかの產物を送つて、これを町人の手に渡すことがふつうになつてゐました。貨幣を自由に取りあつかつてゐる町人は、かうして武士の勢力にとつて代つて、いつの間にか世の中を實際に動かして行く、大きな力となつて行きました。

幕府は、このやうな世の中を、變へようとして、力をつくしました。寛政年間に、老中となつた松平定信は、ぜいたくをいましめて、質素なくらしをすることを、すすめました。また諸大名に命じて、ききんの年に、そなへるために、もみを貯へさせたり、また、ごく貧しい人人を救ふ制度をつくつたりしました。今日の養老院は、この時の制度が長くのこつたものであります。

定信の骨折りもそのかひがなく、定信が退いたのちは、またぜいたくな氣分が年を追うて高まり、武士はますますくらしに困つてきました。天保のころに、老中となつた水野忠邦は、一そうきびしいやり方で、町人の力をおさへようとしました。こののち、こみいつた外交の問題がおこつてきたために、幕府は海岸のそなへをかたくしたり、軍艦を用意したりすることに、たくさんの費用をつかひ、財政はますます苦しくなつてきました。

このやうに行きづまつた世の中を、すつかり改めるために、幕府を倒して、政治の中心を、朝廷にうつさうとする人人が、やうやく多くなつてきました。藩からはなれた浪士たちの間にも、ひそかに京都の公家のもとに出入して、その相談をするものが少くありませんでした。

農村のおとろへ　農村は年貢の高がますます多くなつて行くために、一そう暮しにくくなつてゐました。先祖の時から受けついできた田や畠をすてて、ほかの土地にげて行つたり、町に出て働いたりする人たちもたくさんありました。また天災やききんが、たびたびおこつて人人を苦しめました。天明年間には、ことにはげしいききんがありました。幕府をはじめ諸國の大名は、農民をう系死から救ふために、いろいろ骨を折りました。

このやうにして、農村はだんだんおとろへ、その人口はへり、田や畠は荒れてしまひました。その上、これまで町人の力があまり及んでゐなかつた農村にも、やがてその力が加はつてくるやうになりました。農民が毎日のせはしい仕事のひまに、機を織つたり、紙をすいたりしても、その働きから得た收入が、いつのまにか町人の手に渡つてしまふのでした。

農村がおとろへるやうになると、農民の氣持も、すさんできました。また、農民の上に立つ武士も、前ほどの威勢がなくなつてきました。士・農・工・商といふ身分のちがひも、ただ、名前だけになつてしまひました。

學者の間には、農業をたてなほし、經濟の組み立てをかへて、新しい世の中をつくらうといふ意見を示した人人もありました。佐藤信淵は、ひろく諸國の事情をしらべて、農業の改革を說き、また外國の例をひいて、國を富ますためには產業をおこして、交易を盛んにしなければならないとのべました。

三　開　國

神奈川條約　アメリカは、清國と通商條約を結んでから、間もなく嘉永六年（西暦一八五三年）提督ペリーを、わが國に送つて港を開き、通商を行ひたいと申し出てきました。これは、一つには太平洋を往復する汽船のために、日本の港に石炭を貯へておく場所がほしかつたのです。相模の浦賀で、その手紙を受けとつた幕府では、返事をつぎの年までのばすことにしたので、ペリーは一まづ浦賀を去つて行きました。幕府はこのことを京都の朝廷にしらせ、また國を開くことについて、諸大名の意見も聞くことにしました。これまで何事につけても、すべて幕府だけでとりきめてゐたしきたりが、ここでやぶれて、幕府の威光はやうやく失はれ、大名もそれぞれ思ふままのことを言ひ出すやうになりました。水戸藩の德川齊昭をはじめ、攘夷をとなへるものが多かつたのに、翌年ペリーが神奈川に來た時、幕府は和親條約を結んで、下田と函館の二つの港を開くことを約束しました。

ペリーが幕府におくつた物の中に、電信機や汽車などの模型がありました。わが國の人人は、このめづらしい機械をはじめて見て、すぐれた科學の力に大そうおどろいたといふことです。

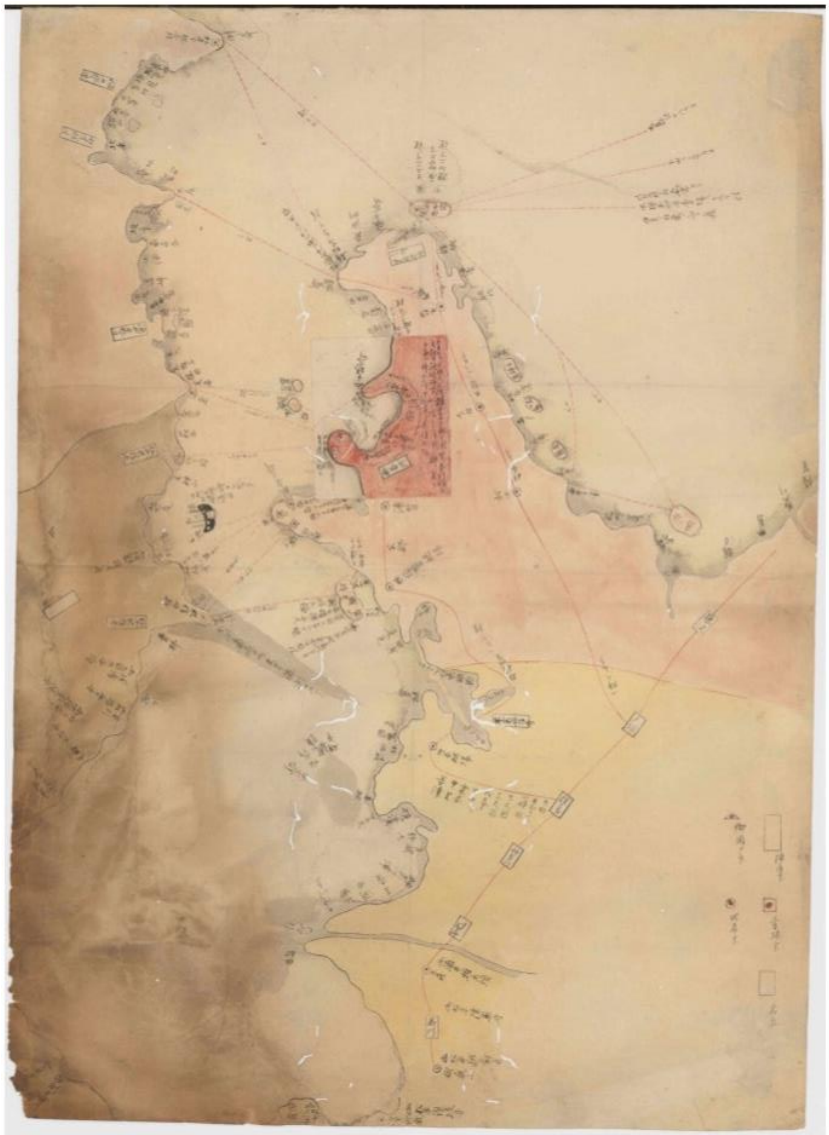
日米通商條約　安政元年（西暦一八五四年）幕府はペリーと神奈川條約を結んだのちに、イギリス・ロシヤ・オランダの三國とも、大たい同じやうな條約を結びました。そのころアメリカから總領事ハリスが來朝しました。世界の大勢を說いて、早く國を開き通商貿易をはじめるやう に、す

（資料オ）

させ，また三都の商人や関東の地主・商人との結びつきを深めて藩権力の強化に成功した。これらの諸藩は社会の変化に即応した新しい動きをとることで，西国の**雄藩**として幕末の政局に強い発言力をもって登場するようになる。

幕府も末期には，代官**江川太郎左衛門**（坦庵）に命じて伊豆韮山に反射炉を築かせた。これら幕府や雄藩の洋式工業は，明治維新後に官営工業の模範となった。

（資料カ）



（資料ア） 芝葛盛『新訂 中學日本歴史 下巻』明治書院、1921 年
（資料イ）、（資料ウ）、（資料エ） 海後宗臣『日本教科書大系 近代編 第二〇巻 歴史(三)』講談社、1962 年
（資料オ） 『諸説日本史』改訂版、山川出版社、2016 年
（資料カ） 神奈川県立図書館デジタルライブラリー浦賀水道海防御固之図より引用

【参考文献】

・仲田正之、『韮山代官江川氏の研究」（１９９８-吉川弘文館）
・仲田正之、『近世後期代官江川氏の研究』（２００５-吉川弘文館）
・仲田正之、『江川坦庵」、（１９８５-吉川弘文館）
・仲田正之、『江川英龍小伝』（１９９４ ‐ 私家版）
・赤瀬浩、『「株式会社」長崎出島』（２００５-講談社）
・浅川道夫、『お台場　品川台場の設計・構造・機能」（２００９-錦正社）
・戸羽山瀚、『江川坦庵全集上巻』（１９５４-江川坦庵全集刊行會）
・戸羽山瀚、『江川坦庵全集中巻』（１９６２-江川坦庵全集刊行會）
・戸羽山瀚、『江川坦庵全集下巻』（１９５５-江川坦庵全集刊行會）
・戸羽山瀚、『江川坦庵全集別巻一』（１９５４-厳南堂書店）
・戸羽山瀚、『江川坦庵全集別巻二』（１９７９-厳南堂書店）
・仲田正之、『江川英龍門人名簿・諸藩別問人名簿』（２０１２ ‐ 私家版）
・山脇悌二郎、『長崎のオランダ商館』（１９８０-中公新書）
・『世界に残る日本の世界遺産～明治日本の産業革命遺産～』（２０１６-ポプラ社）
・金子功、『反射炉Ⅱ大砲をめぐる社会史』（１９９５-平文社）
・橋本敬之、『幕末の知られざる巨人、江川英龍』（２０１４-株式会社　KADOKAWA）
・『日本教科書大系』第２０巻（１９６１ ‐ 講談社）
・『初等科国史上・下』（１９４３）
・『詳説日本史』　改訂版（２０１６-山川出版社）
・芝葛盛『新訂 中學日本歴史 下巻』(1921 年-明治書院)
・海後宗臣『日本教科書大系 近代編 第二〇巻 歴史(三)』(1962 年-講談社)
・勝海舟/江藤淳・松浦玲編『氷川清話』(2011 年-講談社)
・福沢諭吉/土橋俊一 校訂・校注 『福翁自伝』(2013 年-講談社)
・折原祐「江戸期における農兵論の系譜―熊沢蕃山と荻生徂徠―」『敬愛大学研究論集』(1955 年)
・松本洋介『改訂版詳録新日本史史料集成』(2019 年-教育図書出版第一学習社)

【ご協力いただいた先生方】

文学博士仲田正之先生、財団法人江川文庫橋本敬之先生にご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。